



## 水の文化書誌 22

# 《水まわり たらい 鹽と桶のモダニズム》



### 古賀 邦雄

こがくにお  
水・河川・湖沼関係文献研究会  
1967年西南学院大学卒業  
水資源開発公社  
(現・独立行政法人水資源機構)に入社  
30年間にわたり  
水・河川・湖沼関係文献を収集  
2001年退職し現在、日本河川開発調査会  
筑後川水問題研究会に所属

2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設  
URL : <http://mymy.jp/koga/>

日本が貧しかった1950年代、我が家の水まわりは、まさしく貧弱、非衛生、不便性そのものだった。水道は共同栓で外にあり、そこから汲んで土間の台所の甕に溜め、柄杓にすくい、流し台で料理に使った。ご飯は釜に薪で炊き、コークスで熾した七輪で煮炊きを行なった。トイレは外にあり、汲み取り式で悪臭に悩まされた。また風呂は銭湯に通った。洗濯は鹽に洗濯板、石鹸で衣類を洗った。勿論テレビもなくラジオが唯一の娯楽であった。今では想像もで

きない。水は日常生活に欠かせない。生命の維持ばかりでなく安全上、衛生上、支障がないように住宅には必ず水まわりの施設が整っている。給排水設備、給湯設備、排水・通気設備、衛生器具設備、糞尿浄化槽設備、厨房設備、洗濯設備などである。具体的には台所、風呂、洗濯、トイレであり、その変遷を辿ることは水の文化そのものである。

長い間、台所、浴室、洗濯は日常生活と密接にかかわっていたいながら、住宅空間の主要部分でなく、付属部分とみなされてきたという。和田稔子著『近代ニッポンの水まわり』台所・風呂・洗濯のデザイン半世紀(学芸出版社 2008)は、ガス、電気、水道が一般的に普及していなかった大正期から昭和30年代高度経済成長期まで振り返り、水を用いる生活道具と生活空間に注目し、台所、風呂、洗濯を主題として取り上げ、その中でも特に水と接する部分であ

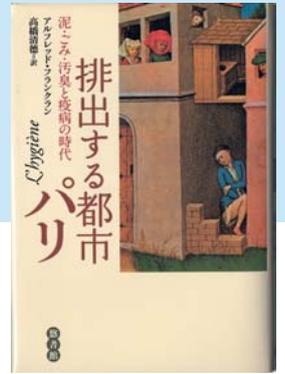
るシンク(水槽)の変遷を辿る。この書の内容は水まわり設備である「台所設備」、「風呂設備」、「洗濯設備」の歴史を道具論的に展開し、本論では「水まわり空間」、「水まわり設備」に関して論じる。その観点から、

- 1 技術革新のプロセス…水まわりデザインの形、素材、技術の革新
- 2 空間構成の特徴…水まわり空間の変容
- 3 流通と消費のメカニズム

であり、水まわり設備の普及を多角的に捉え、そこから近代日本の生活を浮き彫りする。時代的には、大正デモクラシー・台所座り式から立ち式への変化、関東大震災前後・風呂釜の発明(町工場の創意工夫)、第二次世界大戦を経て、戦後アメリカ文化の流入(進駐軍住宅の水まわり)、洗濯機の丸型から角型へのデザイン化、日本住宅公団による新しいライフスタイル・ダイニングキッチンが登場、高度成長期における洗濯機、冷蔵庫、テレビの量産化の半世紀を辿る。それは欧米から多大な影響を受け、住宅空間が近代化する過渡期にあたり、その後はライフスタイルが大きく変化していく。

この書で画期的な水まわりの変化について、3つほど挙げてみたい。

- 1 国家レベルで住宅政策が本格化するの1955年(昭和30)の日本住宅公団の設立以降となる。食寝を分離し、本格的なダイニングキッチンとステンレス流し台の登場である。台所・食事室の台所空間にテーブルと椅子を備えた固定化であり、



今までの板の間の台所に卓袱台を置いた食事からの変化である。

2 また戦後進駐軍住宅における台所・浴室・洗濯機の登場に触発され、水まわりも技術とデザインの革新が行なわれた。例えば、洗濯機は攪拌式から噴流式に変わり、デザインも丸型から角型に変わった。

3 風呂釜、ステンレスの流し台、電気洗濯機の流通は、最初雑誌による通販、メーカー小売店、それからデパートによる高級品デモンストレーション、現在では秋葉原電気街、電気専門店の販売、月賦販売が可能にし、拡大する。さらに広告デザインをみてみると、「冷たい冬のお洗濯」、「女性を解放する洗濯機」、「スイッチ一つのお洗濯」、「洗濯を楽しく、明るく!」のキャッチフレーズを入れ、イメージキャラクターとして新珠三千代、八千草薫、高峰秀子、木暮実千代、若尾文子ら、女優を登場させて電気洗濯機の普及を図った。

電気洗濯機の価格変遷は、森永卓郎監修『明治／大正／昭和／平成／物価の文化史事典』（展覧社 2008）によると、昭和27年5月米車から日本側に洗濯機1000台の発注があり、日立が攪拌式角型洗濯機を納入、価格は5万3900円であった。大卒男性初任給1万9000円のころである。

日常生活にかかわる水については、紀谷文樹ら著『暮らしをささぐえる水』（彰国社 1987）、同編著『建物をめぐる水の話』（井上書院 1986）があり、料理と水、食器洗い、給水

と給湯の流れ、水洗便器、配管と管材などが記されている。深井英一、高地進著『建設設備の節水ガイド』（理工図書 1995）は、新設や改修における節水機器の利用法、循環利用、排水再利用などを中心にまとめられており、一方、泉忠之編著『住まいの水まわり学入門』（TOTO出版 1995）では、水まわりに

関連して、住宅の構法や仕上げ、色彩計画、照明計画、水まわり機器、給排水設備を言及し、室内の利便性、快適性を追及する。人は汗や糞尿を排泄しなければ生きていけない。フランス華の都パリでは、1000年間、市民は糞尿まみれの日常生活が続いたというから驚嘆する。アルフレッド・フラン克蘭著『排出する都市パリ泥・こみ・臭気と疫病の時代』（悠書館 2007）には、12世紀から18世紀にかけて人や動物による糞尿があふれ、悪臭と疫病が蔓延し、王たちがその対策に悪戦苦闘する、パリにおける状況を詳細に描く。

我が国では糞尿は農産物の肥料として取引対象となっていた。戦後化学肥料が主流となり、その後、下水道システムの設置により水洗トイレが普及する。前田裕子著『水洗トイレの産業史—20世紀日本の見えざるイノベーション』（名古屋大学出版会 2008）は、日本近代化における水洗トイレが、給排水システムに組み込まれる過程をトイレ産業にかかわる森村組、日本陶器、東洋陶器などメーカー側から追求する。面白いことは、陶器会社がその後水洗ト

イレ機器の生産に踏み出したことである。水洗トイレはそれ自体偉大な3つのイノベーションを持つているという。1 公衆衛生面で、都市の衛生状態を改善し人間の健康維持に寄与する。2 清潔の面で、疫病の予防、悪臭や汚物の放置の改善。3 心理的な面で、排泄行為への感覚を刷新し、排泄空間の快適さを生んだ。

前述の戦後占領軍の要求には、「600名の士官のため、浴室、及び便所の施設を有するホテル、また宿舍」とあり、水まわり設備に対するもので、このとき東陽が9割を受注したという。

現在、水洗トイレのシステムが確立されなかつたら、14世紀ごろの糞尿まみれのパリのような状況が続いたことであろう。このような意味では近代的な水洗トイレのイノベーションは、衛生や清潔への希求は勿論のこと、快適空間へ移行しつつあるという。なお、トイレに関しては、あくば（灰汁場・芥場）、石雪隠、陰所など多数収めた森田英樹著『便所異名集覧』（下水文化研究会 2002）、それに雨水をトイレの水に使うことを提言する湯川清貴著『雨水利用システムの製作』（ハワー社 2006）を挙げる。

最近、雨水を捉えなおそうという考え方が顕著になってきた。雨を溜めれば水資源、捨てれば勿体ない雨水を溜め、家庭菜園、洗車、防火水槽などに使い、残りは地下に浸透

させる。また、住宅、集合住宅、ビルなどは新築、増改築を施し、コンクリートの雨水貯留槽を地下に埋設し、雨樋から水を集め、雨水貯留槽に溜め、それをトイレの洗浄水、散水、洗車に使う。このことは日本建築学会編『雨の建築学』（北斗出版 2000）、同編『暮らしに活かす雨の建築術』（北斗出版 2005）に、図でわかりやすく記されている。急速な都市化で真間川などの水害に悩まされた千葉市川市は、新住宅を建築する場合は、雨水利用施設の設置を条例化している。この雨水施設は、中水道を利用する新しい水まわりの役割を果たしているといえる。

以上、水まわりについて概観してきたが、前書『近代ニッポンの水まわり』では、次のように結論づける。「近代化以前の水まわりの道具として、甕と桶があり、自由に時間的に、空間的に、地域的に移動、利用できた。日本独特の水まわり空間が確立するのは1950年代以降であった。欧米のモダンニズムの影響を受け、そこから派生した日本独特の甕と桶のモダンニズム化があることを突きつめた。そのことは「女性を解放する電気洗濯機」というキャッチフレーズにみられるように、水まわりの近代化、即ち「甕と桶のモダンニズム化」は、住宅、生活改善に伴う衛生的、利便性、快適性を希求した結果、女性（男性も）が解放されたと同時に民主化をもたらした一面を担ったといえるのではなからうか。

